

NEWSLETTER

No.13

2005年5月25日

会長 小泉保 事務局 〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1-1桃山学院大学 林 宅男 研究室内
TEL 0725-54-3131 (代表) FAX 0725-54-3202
psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp (林 宅男) URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4>
郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

会員の皆様、お変わりありませんか。
日本語用論学会Newsletter第13号をお届けします。さる3月25日に、第25回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

★ 会長挨拶に代えて

「礼節という前提」 小泉 保

中国の聖人孔子の故郷曲阜を訪れたことがあります。礼節を重んじる儒教の祖、孔子の霊廟に対し、中国歴代の王朝が敬意を払い、廟殿を寄進しています。異族の出身である元朝も清朝も丁重に扱っています。しかし、毛沢東は孔子を批判し、紅衛兵たちは曲阜の城壁を取り壊してしまいました。このように、孔子の霊廟に危害を加えたのは共産王朝だけです。

日本では、論語は人生訓として、教養の根底をなしてきました。「衣食足りて礼節を知る」礼節こそ文明と野蛮を区別する基準とされてきました。そこで、今まで中国は礼節の国という前提（思い込み）がありました。このたび中国における反日デモを見ていると、中国は、失礼、非礼、無礼の国であることを思い知らされました。

もはや、中国には、礼節という徳目はなく、単なる権謀術策のみで動いている国であると思います。こうした視点で中国に対処する必要があります。

前提は語用論の主要部門です。ただ、否定や疑問文の前提だけでなく、それぞれの語彙項目には、意味に加えて前提の部分が

あると考えられます。こうした前提は、百科事典的知識からだけでなく、個人的経験や思い込みから出てくるものもあるようです。こうした観点から、前提を分析してみる必要があると思います。

★ 事務局より

1) 大会発表申し込み等の原稿のメールでの受付

今年度の大会より、大会での発表申し込み等の提出方法を電子メールでも受け付けることになりました。電子メールで発表の申し込みを提出する場合は、通常郵便での別郵送は不要です。締め切り期限内に電子メールで受理した原稿につきましては、事務局から電子メールで受理のお知らせをします。詳しくは、本Newsletter「応募規定」(pp.3-5)の欄をご覧ください。

2) プロシーディングの発行のお知らせ

日本語用論学会は1998年に発足し、刊行物としては、毎年、大会での発表論文のハンドアウトをまとめ大会当日にお渡ししておりました「予稿集」(2003年度大会までの名称は「Program & Abstracts」)と、学会誌「語用論研究」を発行してまいりました。先の運営委員会では、本年度より、これらに加え、新たに、毎年、大会で発表された論文をとりまとめた「プロシーディング」を大会後に発行することになりました。この度の論文集の発刊を機に、会員の皆様には、どうか、奮って大会での発表に御応募いただきますようお願いいたします。

3) 学会名簿作成の御連絡

本学会は、今年で発足以来 8 年目を迎えようとしていますが、お陰様で会員数も 400 名を越す規模となり、順調に発展を続けております。そこで、この度、学会の更なる発展と会員相互の連絡交流の促進を計ることを念頭に、学会員名簿を作成することになりました。会員の皆様には、既に、氏名、住所、所属（身分）、電話番号、ファックス番号、電子メールアドレスを御連絡いただいております。名簿の発行に付きましては、近年、特に個人情報保護の観点から、様々な問題が指摘されていることは御承知の通りでございます。そこで、本学会でも、これらの情報につきましては、その適正な取扱いの確保と個人の権利や利益の侵害の防止を図る為、その公表には慎重な取り扱いをさせていただき所存であります。今回の名簿には、昨年度の学会費を納入された方を掲載し、可能なら、今年 12 月の大会にあわせて名簿を発行する予定です。

尚、個人情報保護の関係上、会員名簿冊子上で公表を希望されない情報につきましては、同封の、郵便振替、振込取扱票の備考欄の項目(1. 氏名、 2. 住所、 3. 所属(身分<教員、学生、非常勤等>)、 4. 電話番号、 5. ファックス番号、 6. メールアドレス)のにX印をお付けいただき、会費の納入の際にお知らせ戴きますようお願いいたします。

★ 第 7 回大会成功のうちに終了

日本語用論学会第 7 回大会は、2004 年 12 月 11 日(土)甲南女子大学で開催されました。当日は、他の学会も開催されていたことなどから、参加者数を心配しておりましたが、160 人の方にお出でいただきました。あらためて、語用論に対する関心の高さを知ることとなりました。会場をお世話いただいた甲南女子大学の林礼子先生をはじめとする諸先生方、司会の先生方、ならびに院生・学生の皆様に心から感謝いたします。

午前中は、10 時から 11 時 40 分まで、個人発表は 4 室(発表件数 11 件)、グループ

発表は 1 室(発表件数 4 件)で、ワークショップが行われました。各部屋では、活発な議論が交わされておりました。

午後からは、12 時 40 分から第 7 回総会が開かれました。小泉会長の挨拶に続いて、事務局報告、編集委員会報告、会計報告がなされました。

続いて、13 時から 15 時 30 分までは、研究発表が A 室～D 室に別れ、各会場 4 件、計 16 件行われました。どの会場でも活発な質疑応答がなされました。

更に、15 時 45 分から 18 時 10 分までは、「ジェンダーと語用論-- 記号論・エスノメソドロジー・批判的談話分析からの提言」(司会：林礼子、講師：小倉孝誠、中村桃子、山崎敬一、山崎晶子、ディスカサント：佐竹久仁子)と題して、シンポジウムが開催されました。ジェンダーと語用論について、熱気に満ちあふれた議論が交わされ、今回も充実したシンポジウムとなりました。シンポジウムの内容は今年の『語用論研究』第 7 号に掲載の予定です。

★ 第 7 回大会総括

| | |
|---------------------|-----------|
| 1. 参加者 | 160 名 |
| 現会員 | 106 名 |
| 新入会員 | 13 名 |
| 当日会員 | 41 名 |
| 2. 懇親会参加者 | 41 名 |
| 3. 第 7 回大会運営費(支出)内訳 | |
| 人件費 | 91,000 円 |
| 事務局費 | 128,250 円 |
| 講師謝金 | 80,000 円 |
| 講師交通費 | 120,000 円 |
| 懇親会費 | 240,000 円 |
| 合計 | 659,250 円 |

★ 2004 年度の会計報告

本学会の会計年度の締めは 3 月末日となっており、昨年度の決算報告は以下の通りです。会員の皆様には今年の 12 月の大会時にお諮りし、御承認いただく予定です(会計監査委員からは、既に監査を受けました)。

(1) 2004 年度(平成 16 年度)決算報告

| | |
|--------------------|-------------|
| (収入) | |
| 前年度繰越金 | 2,641,689 円 |
| 会費 (348 名) | 1,392,000 円 |
| 学会当日会員会費 | 95,000 円 |
| 懇親会費 | 164,000 円 |
| 予稿集売り上げ | 168,000 円 |
| 『語用論研究』バックナンバー売り上げ | 49,500 円 |
| 学会補助 | 160,000 円 |
| 普通預金利息 | 102 円 |
| 合計 | 4,670,291 円 |

| | |
|---------------|-------------|
| (支出) | |
| 印刷費 予稿集 2004 | 196,770 円 |
| 『語用論研究』 | 388,608 円 |
| プログラム | 47,775 円 |
| 封筒 | 102,060 円 |
| 郵送費 | 130,735 円 |
| 事務局費 | |
| (会議費、学会当日諸費用、 | |
| 雑費、消耗品など) | 236,080 円 |
| 人件費 (学生アルバイト) | 140,500 円 |
| 旅費交通費 | 20,000 円 |
| 講師謝金 | 80,000 円 |
| 懇親会費 | 240,000 円 |
| 合計 | 1,682,528 円 |

次年度繰越金 2,987,763 円

(2) 2004 (平成 16) 年度予算

(大会が 12 月のため、毎年その年度の予算を大会時に決めております。以下は第 7 回大会で承認されました。)

| | |
|--------------------|-------------|
| (収入) | |
| 会費 (4,000 円×300 名) | 1,200,000 円 |
| 当日会費 | 30,000 円 |
| 予稿集売り上げ | 180,000 円 |
| バックナンバー売り上げ | 20,000 円 |
| 学会補助 | 100,000 円 |
| 合計 | 1,530,000 円 |

| | |
|-------------|-----------|
| (支出) | |
| 印刷費 | |
| 予稿集 | 180,000 円 |
| 学会誌 (語用論研究) | 400,000 円 |

プログラム、学会封筒など

| | |
|------------------|-------------|
| | 70,000 円 |
| 郵送費 | 150,000 円 |
| 事務局諸経費 | 50,000 円 |
| 大会当日諸経費 | |
| (文房具、講師料、アルバイト代、 | |
| 会場費、雑費、懇親会費補助など) | 500,000 円 |
| 旅費交通費 | 60,000 円 |
| 合計 | 1,410,000 円 |

★ 次回大会開催校・研究発表募集

今年度の第 8 回大会は 2005 年 12 月 10 日 (土)、京都大学 (〒606-8501 京都市左京区吉田本町 TEL: 075-753-7531(代)) で開催される予定です。奮ってご参加・ご応募下さい。

★ 大会「研究発表」・「ワークショップ発表」募集

第 8 回大会の研究発表、ワークショップ発表の募集をいたします。下記の要領でふるってご応募下さい。

<<応募規定>>

大会研究発表応募規定

1. 発表応募者は会員に限ります。
2. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募 1 ヶ月以内に応募者に通知します。
3. 発表時間は一人 25 分以内 (別に質疑応答 10 分)。
4. 応募締め切りは毎年 8 月 31 日。
5. 提出方法 電子メールか通常郵便でお届けください (電子メールで提出する場合は、通常郵便での別郵送は不要です)。電子メールで締め切り期限内に受理した原稿につきましては、事務局から受理のお知らせをお送りします。

《電子メールの場合》

件名を「研究発表応募」とし、添付書類でなく、テキスト形式で事務局アドレスまでお送りください (下記の要領参照)。なお、図版等があり、テキスト形式が困難な場合

は pdf 形式、あるいは、Microsoft Word 形式の添付ファイルでお送りください。

テキスト本文では、冒頭に（研究発表）と明記し、その後、題目、氏名（必ずふりがなをつける）、所属・職名、住所、電話番号・ファックス番号、電子メールアドレスの順にヘッドを、その後に発表要旨を付けてください。その際、ヘッドと発表要旨の間に-----を入れて下さい。発表要旨は 25 文字 x30 行 x3 ページ以内（参考文献は文字数に含めません）にまとめてください。また、発表要旨には、1 行目に再度題目を付けてください

<要領>

（研究発表）

題目：XXXX

氏名：XX XXX（ふりがな）

所属：XX 大学 XX 学部

住所：〒xxx-xxxx XXXX.

電話番号：xxx-xxx-xxxx

電子メールアドレス：xxxxx@xxxx

題目（研究発表）： 「XXXX」

（例）本発表では・・・

《通常郵便の場合》

冒頭に（研究発表）と明記し、発表要旨は、A4 の用紙を用いて、余白を十分取り、1 行目に発表題目を明記し、25 文字 30 行で 3 枚以内にまとめて 3 部（コピーで可）を提出してください（参考文献は字数に含めません）。名前等は発表要旨には書かないで下さい。別紙（A4）に、題目、名前（必ずふりがなをつける）、所属・職名、住所、電話番号・ファックス番号、e-mail アドレスを明記したものを添付してください。

6. 提出先

《電子メールの場合》

psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp

（件名を「ワークショップ発表応募」として下さい。）

《通常郵便の場合》

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学 林 宅男 研究室内 日本語用論学会事務局 TEL 0725-54-3131 FAX 0725-54-3202

（封筒の表に必ず「研究発表応募」と朱書きしてください。）

7. 応募者が会員でない場合、応募と同時に入会の手続きをしてください。

大会ワークショップ発表応募規定

1. 発表応募者は会員に限ります。
2. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、選考結果は応募 1 ヶ月以内に応募者に通知します。
3. 発表時間は一人 15 分以内（別に質疑応答 5 分）。
4. 応募締め切りは毎年 8 月 31 日。
5. 提出方法 電子メールか普通郵便で送付ください（電子メールで提出する場合は、通常郵便での別郵送は不要です）。電子メール締め切り期限内に受理した原稿につきましては、事務局から電子メールで受理のお知らせをお送りします。

《電子メールの場合》

件名を「ワークショップ発表応募」とし、添付書類でなく、テキスト形式で事務局アドレスまでお送りください（下記の要領参照）。なお、図版等があり、テキスト形式が困難な場合は pdf 形式、あるいは、Microsoft Word 形式の添付ファイルでお送りください。

テキスト本文では、冒頭に、「ワークショップ」と明記し、その後、題目、氏名（必ずふりがなをつける）、所属・職名、住所、電話番号・ファックス番号、電子メールアドレスの順にヘッドを、その後に発表要旨を付けてください。その際、ヘッドと発表要旨の間に-----を入れて下さい。発表要旨は 25 文字 x30 行 x3 ページ以内（参考文献は文字数に含めません）にまとめてください。また、発表要旨には、1 行目に再度題目を付けてください

<要領>

(ワークショップ)

題目：XXXX

氏名：XX XXX (ふりがな)

所属：XX 大学 XX 学部

住所：〒xxx-xxxx xxx

電話番号：xxx-xxx-xxxx

電子メールアドレス：xxxxx@xxxx

題目 (ワークショップ) : 「XXXX」

(例) 本発表では・・・

《通常郵便の場合》

冒頭に、「ワークショップ」と明記し、発表要旨は、A4 の用紙を用いて、余白を十分取り、1 行目に発表題目を明記し、25 文字 30 行で 1 枚以内にまとめて 3 部 (コピーで可) を提出してください (参考文献は字数に含めません)。名前等は発表要旨には書かないで下さい。別紙 (A4) に、題目、名前 (必ずふりがなをつける)、所属・職名、住所、電話番号・ファックス番号、e-mail アドレスを明記したものを添付してください。

6. 提出先

《電子メールの場合》

ps.j-hayashi@kcc.zaq.ne.jp

(件名を「ワークショップ発表応募」として下さい。)

《通常郵便の場合》

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学 林 宅男 研究室内 日本語用論学会事務局 TEL 0725-54-3131 FAX 0725-54-3202

(封筒の表に必ず「ワークショップ応募」と朱書きしてください。)

7. 応募者が会員でない場合、応募と同時に入会の手続きをしてください。

8. 発表は個人の他、グループでの応募も可能です。グループでの応募の際は、一人一人の発表要旨、題名、グループ全体のテ

マを明記して下さい。また、グループの代表者のみでなく、グループの一人一人の名前、所属なども付けてください。

★次回大会シンポジウムについて

次回大会のシンポジウムは、歴史語用論をテーマに行いたいと考えています。現在、講師および司会、コメンテーターを企画中であります。講師やコメンテーターとして参加なさりたい方は、下記の西光義弘のアドレスまでご連絡ください。

nisimitu@kobe-u.ac.jp

★『語用論研究』第 7 号投稿募集

学会誌『語用論研究』第 7 号への投稿を募集しています。投稿規定は『語用論研究』第 6 号と学会のホームページに記載されているとおりです。多数のご応募をお待ちしています。以下の要領でご応募下さい。締め切りは 2005 年 8 月 31 日 (火) です (研究発表応募と同じ)。

<<投稿規定>>

1. 投稿は会員に限ります。(会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとって下さい)。
2. 投稿論文は未公開の論文に限ります。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象にします。同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めません。また、応募の際は、本人と分かる書き方はできるだけ避けて下さい。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とします。
4. 投稿締め切りは、毎年 8 月 31 日、採否決定を 10 月末日、刊行を 12 月とします。
5. 枚数、書式など。
 - a. 原稿枚数：A4、横書き、15 枚以内 (注、参照文献を含む)。
 - b. 書式：1 ページにつき、日本語の場合は 32 行×38 文字とし、英語の場合は 1 行 70 ストローク、32 行とします。フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避けて下さい。注や、参照文献の活字を小さくし

ないでください。ただし、図表の挿入は可能です。

- c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと2行空けて、本文を続けて下さい(氏名は書かない)。
 - d. 例文と本文の間、及び、各節の前は1行、空けてください。
 - e. 注は、1,2,3のように、括弧を用いない数字だけとします。
 - f. 見出しのサブセクション番号は、1.1.のように、数字の後にピリオドを置きます。
 - h. セクションの「はじめに」または「序論」は、1.ではじめます。
6. 注は参考文献の前にまとめて付けて下さい。
 7. 参考文献(本学会誌では、参考文献、引用文献という表現は使いません)の書式は以下の例にならして下さい。

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hopper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語用論—』東京：三省堂。

野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』Vol. 24, no.2 (2月号) 62-69. 東京：大修館。

8. 提出部数：原稿は6部提出して下さい(コピー可)。
9. 氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、所属、職名、連絡先電話番号、FAX番号、e-mailアドレスを別紙に記入して下さい。
10. 送付先：〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1 関西外国語大学 澤田治美研究室内 TEL 072-805-2801 (代) (「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きのこと)
11. 掲載決定後に、最終原稿の入ったフロッピーディスクと完成原稿の提出を御願いたしますが、フロッピーディスクは返却いたしません(送付先等詳細は、掲載決定者に別途通知します)。

<<注意事項>>

- (1) 研究発表、ワークショップの応募、『語用論研究』の投稿とも、会員に限るという規定がありますので、会員でない方は応募と同時にご入会下さい。入会方法等は、学会のホームページを参照して下さい。
- (2) 他学会との二重投稿はご遠慮下さい。特に、研究発表、ワークショップは同時期に行われる他学会との二重投稿はご遠慮ください。また、研究発表と『語用論研究』へ同時に同じ内容を応募するのも、お控え下さい。『語用論研究』への応募は、活字になっていないもので、語用論学会の研究発表やワークショップで発表したもの、あるいは他学会ですでに発表したものなどを歓迎します。
- (3) 研究発表、ワークショップへの応募の要旨と、『語用論研究』への応募原稿は、ご本人と分かるような書き方はできる限り避ける。また、『語用論研究』への応募原稿の段階では、「・・・学会で発表したものである」というような謝辞などは書かないようにお願いします。掲載決定後にはお書きいただいて結構です。

なお、上記の案内は『月刊言語』(7月号)『英語青年』(7月号)『日本語学』(7月号)に掲載の予定です。

★ 学会費の払い込み

このニューズレターとともに2005年度会費(4,000円)の振替用紙が同封されています。この用紙でお早めに振り込み下さいますようお願いいたします。振替用紙が、2枚入っている方は昨年度分の会費が未納の方ですので、学会の会計をご理解の上併せてお払い下さい。2年連続して会費を未納されますと、会員の資格を失効します。な

お、住所・所属に変更や移動のある方は、事務局宛にメールあるいは郵送でご連絡ください。振り込み用紙の通信欄に書くのはなるべくお控えください（文字がかすれて読めないことがあります）。なお、行き違いがある場合はご容赦下さるようお願いいたします。

★ 語用論関係の新刊書紹介

児玉徳美. 2004. 『意味分析の新展開--ことばのひろがりに応える・開拓社叢書13』東京：開拓社。

山中桂一・原口庄輔・今西典子（編）『＜英語学文献解題 第7巻＞意味論』東京：研究社。

山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』東京：開拓社。

Atlas, J.D. 2005. *Logic, Meaning, and Conversation: Semantical Underdeterminacy, Implicature, and Their Interface*. Oxford: OUP.

Belletti, A. (ed.) 2004. *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*. Oxford: OUP. (特に同書の G. Chierchia, "Scalar Implicatures, Polarity Phenomena, and the Syntax/Pragmatics Interface." 39-103)

Bianchi, C. (ed.) 2004. *The Semantics/Pragmatics Distinction*. Stanford: CSLI Publications.

Blunter, R. and H. Zeevat. 2004. *Optimality Theory and Pragmatics*. Hampshire and New York: Palgrave Macmillan.

Cummings, L. 2005. *Pragmatics: A Multi-disciplinary Perspective*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Cruse, A. 2004. *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*. Oxford: OUP.

Davis, S. and B.S. Gillon (eds.) 2004. *Semantics: A Reader*. Oxford: OUP.

Kamp, H. and B.H. Partee (eds.) 2004. *Context-Dependence in the Analysis of Linguistic Meaning*. Amsterdam: Elsevier.

Onodera, Noriko. 2004. *Japanese Discourse Markers. Synchronic and Diachronic Discourse Analysis*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Potts, C. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: OUP.

Szabo, Z.G. (ed.) 2005. *Semantics versus Pragmatics*. Oxford: OUP.

Takenoya, Miyuki 2003. *Terms of Address in Japanese: An Interlanguage Pragmatics Approach*. Hokkaido University Press.

★ Forum

このところ、『万葉集』に魅せられています。ご存じのように、『万葉集』は20巻からなり、短歌、長歌、旋頭歌など、あわせて4,500余りの歌がありますが、私が心惹かれる歌の一つに次の歌があります。

あみの浦に 船乗りすらむ^{おとめ}娘子らが
^{たまも}玉裳の裾に ^{しほ}潮満つらむか
 (巻 I. 40)

「伊勢國に幸しし時、京に留れる柿本朝臣人麿の作る歌」と題詞にあるように、伊勢への持統天皇の行幸(692年3月6日～20日)に際して、飛鳥の京にとどまった人麻呂の作った歌です。一般には、伊勢の海辺で官女が船遊びをしているのを、都にいて想像し、その光景に対するあこがれ

を詠ったものとされています。なぜ、持統天皇はこの時期、反対を押し切ってまで伊勢に赴いたのか、「娘ら」とはある特定の女性なのか、「あみの浦」とはどこなのか、「潮満つ」とはどういう状態を指すのか、など興味はつきません。澤瀉(1957:302)は、実景を想像しての作であるので「らむ」が用いられたのも不思議ではないが、それが2度繰り返されることによって「音楽的な律動」が作り出されていると述べ、伊藤(1995:145)は、人麻呂の特定の恋人をイメージする必要はなく、「この歌を享受した人びとは、男であれ、女であれ、潮騒に玉藻の裾を濡らす一人の美しい女を想い見ては、それぞれ、好きな人の映像を任意に心に植えつけたのであろう」と書いています。これに対して、和田(1986:59)は、万葉集において使用される「らむ」の叙述内容は、主体の心に動揺や心配・危惧の念を抱かせる事柄であり、「明るい歓声をこだまさせる遊興の様を想像させるのではなく、かえって、京に留まった人麿が、共奉して行った人を心配する歌である可能性が強いように思われる」としています。

リービ(2004:47)は上の歌を次のように英訳しています。

On Ami Bay, the girls must now
Be riding in their boats.
Does the tide rise
To touch the trains
Of their beautiful robes?

ただ、この訳で気になるのは、「らむ」を must で訳しているということです。must は、一般に、「証拠性」のある事柄について推断する傾向が高いからです。『万葉集』の中の「らむ」で「証拠性」を有するものはどれだけ

あるのでしょうか。こうしたことに関して、今後、多くの先達の研究を参考にしつつ、そして、なによりも歌を楽しみつつ、考えてみたいと思っています。

(澤田治美)

今回のニューズレターは盛りだくさんになりました。会員の皆さんからの語用論関係のニュースも歓迎します。ぜひ、事務局までお寄せください。

(広報委員長 久保進 記)